

飛鳥・藤原地域の川原寺式軒丸瓦

清野孝之

I はじめに

川原寺は、天武天皇2年（673）3月に行われた一切経の写経の記事が正史における確実な初見であり、藤原京期には四大寺の一つとして、天皇の病気平癒祈願や追善供養の場などに用いられた。しかしその創建については不明な点が多く、年代にも諸説あるが、亡き母齊明天皇の冥福を祈るために天智天皇によって発願されたとみて、齐明天皇崩御（661）後、大津遷都（667）前とする福山敏男説が通説となっている（福山1948）。

創建期の主要な軒瓦は、面違鋸齒文縁複弁八弁蓮華文の川原寺式軒丸瓦601型式と四重弧文の同軒平瓦651型式である（以下、川原寺601型式などと表記）（奈文研1960）。このうち川原寺601型式はA・B・C・E

種に分かれ（以下、川原寺601Aなどと表記）、製作技法やその変化、同范事例の検討などが進められてきた（図1～3）。また、その紋様の影響を受けた軒丸瓦が広く分布し、各地の造瓦、造寺の様相をうかがい知るてがかりとなる場合も多いことから注目してきた¹。

一方で、これと組み合う軒平瓦やそのほかの瓦については、軒丸瓦に比べ研究が十分に深められていないのが現状であり、これらを含む総合的な検討には、なおしばらくの準備が必要である。そのため、実態の一面のみを捉えた不十分な検討とはなるが、本稿では川原寺601型式を対象として検討を進める。

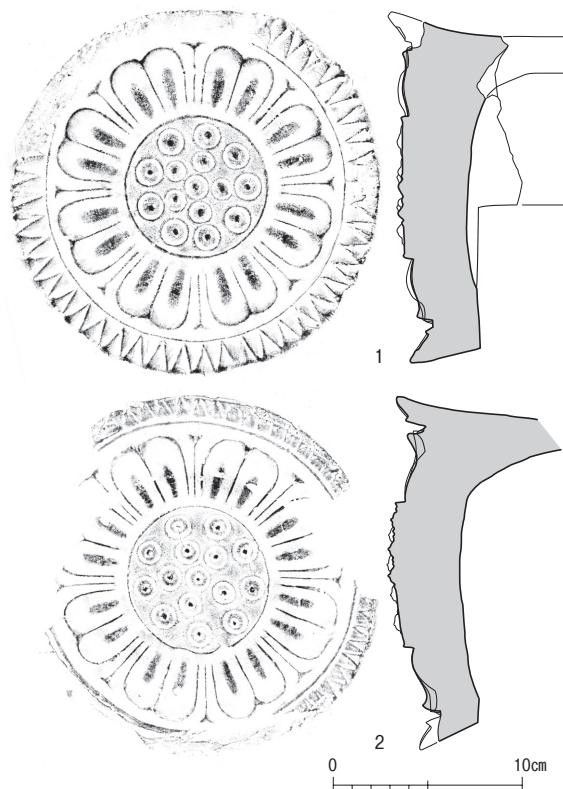


図1 川原寺出土川原寺601型式
1：A種、2：B種 縮尺1：4

筆者は近年、大和以外の川原寺601Cの同范事例を分析し、その成果を報告してきた（川畑・渡部・清野・石田・道上2020、清野2022）。本稿では、飛鳥・藤原地域の川原寺601型式を対象に検討をおこなうことにより、川原寺式軒瓦の生産と供給の実態を解明するがかりとしたい。以下、まずは川原寺601型式に関する従来の研究を概観し、次に、飛鳥・藤原地域における川原寺601型式の様相を確認する。そして最後に、当該地域における川原寺601型式の供給の特徴を検討する。

II 川原寺601型式の製作技法とその変化

1 川原寺601型式の製作技法による分類

川原寺601型式の製作技法については、金子裕之氏が検討をおこない、I型からIII型に分類した（金子1983）。金子氏の分析は的確であったため、その分類が現在も一般的に用いられている。そのため、本稿でもこれを踏襲し、金子I～III型と呼ぶこととする。

金子I型 瓦当裏面を中凹みにつくるもの。

金子II型 瓦当を厚く裏面を平らにつくるもの

金子III型 瓦当を薄く裏面を平らにつくるもの。

金子氏は、これら技法がI型→II型→III型の順に変化したこと、川原寺601型式のA種がI型、B種がI・II型、C種がI・II・III型、E種がI・II型と対応することから、製作開始が型式学的に同時であるが、まずA種が製作を終え、次いでB・E種が、最後にC種が製作を終えるという3段階の変遷が認められることを指摘した。また、C種のI・II型のものはIII型のものに比べて範がよりシャープであること、C種の一部には胎土が他と異なり、色調も黒褐色を呈する焼成の悪い瓦があることを指摘し、他のものは奈良県五條市荒坂瓦窯産と推定されるが、このC種の一部が荒坂瓦窯の製品か否かは不詳とした。

E種の一部には、内・外区の境目の凹線部（以下、内区周縁部と表記）に、範割れによって生じた粘土の小さな盛り上がりがあることを指摘する。この「盛り上がり」とは、後述するC種4段階の指標となる大きな範傷と類似したもので、この範傷が1→5→6カ所と

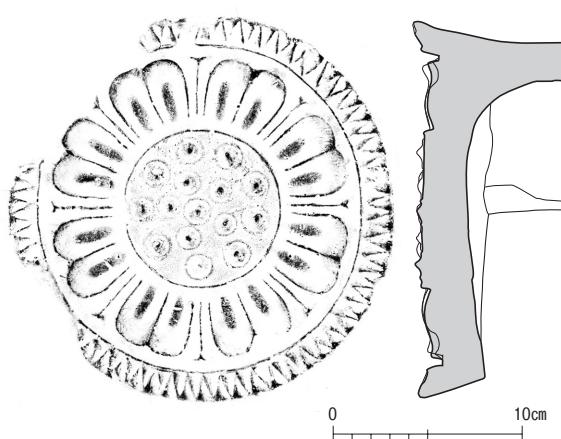


図2 川原寺出土川原寺601C 縮尺1:4

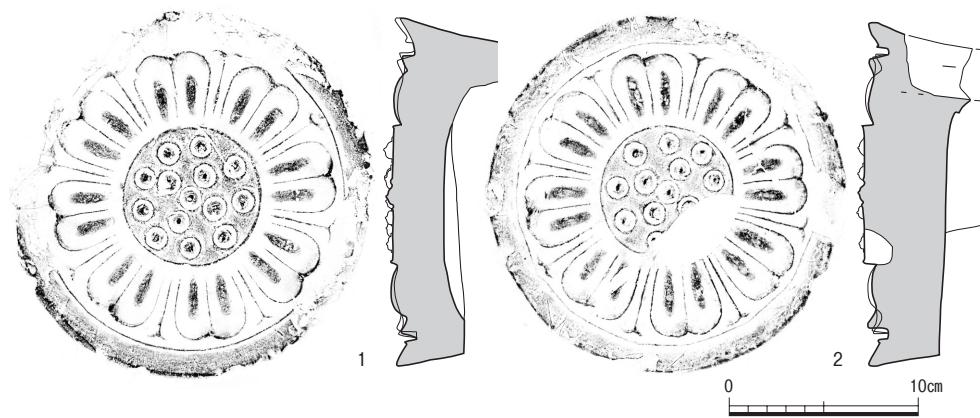


図3 川原寺出土川原寺601E 1:金子I型、2:金子II型 縮尺1:4

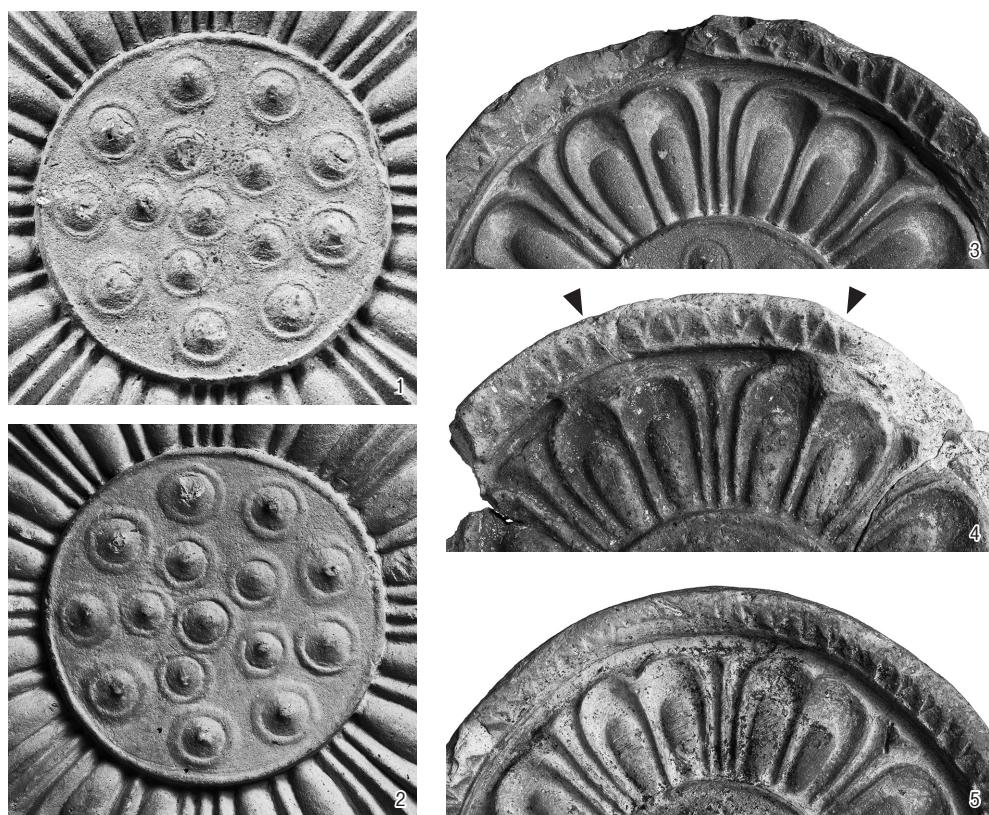


図4 川原寺601Cの范の変化 1:1段階の中房、2:2段階の中房（蓮子周環彫り直し）、
3:1段階の内区周縁部、4:4段階の内区周縁部（▼の位置の内区周縁部に范傷）、5:
5段階の内区周縁部（范傷を埋め木して補修） 写真はすべてスケールアウト。以下同様。

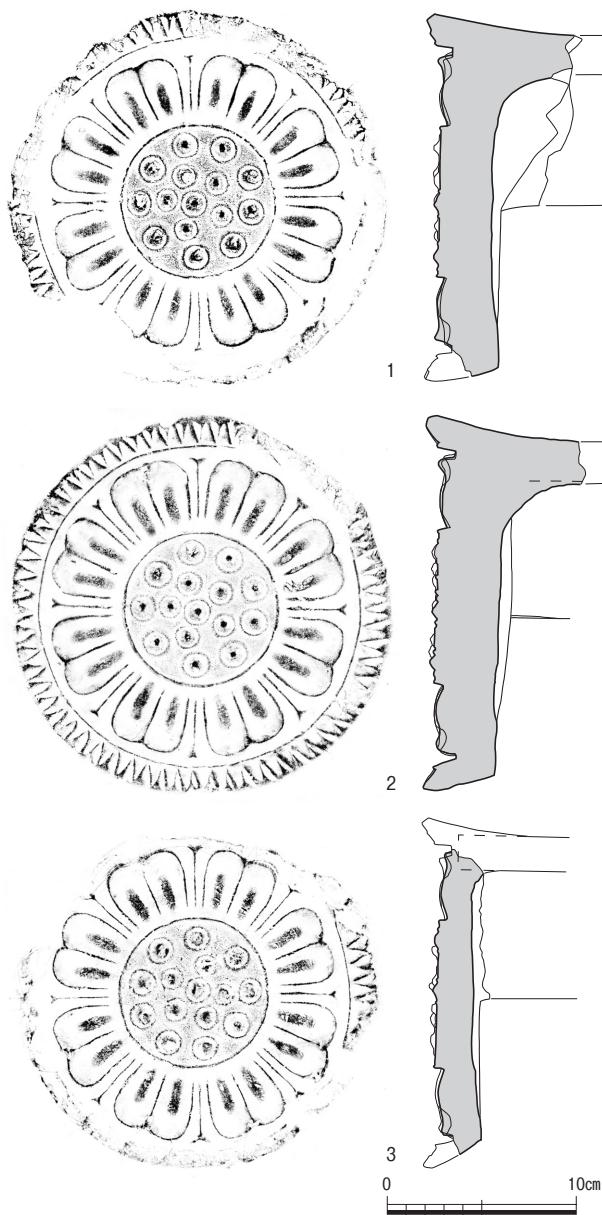


図5 川原寺601Cの范傷段階
1：1段階、2：2段階、3：3段階 縮尺1：4

1段階：傷や磨耗がほとんどないもの。

2段階：蓮子周環を彫り直し、不整形になるものが現れる。

3段階：中房や弁区に木目が浮き出す。

4段階：弁端と外区の間（内区周縁部）に大きな范傷が現れ、まもなく2個になる。

5段階：范傷を埋め木して修復する。

増えていくこと、金子Ⅰ型は各段階の范傷をもつ製品があるのに対し、金子Ⅱ型は范傷6カ所の製品のみであることを指摘した²。

2 川原寺601Cの范傷進行と技法の変化

2003年3月と翌年2月に開催された第6・7回古代瓦研究会シンポジウムにおいて、川原寺式軒瓦がテーマとして取り上げられ、2009年3月に報告書が刊行されて研究が一気に進展した。このなかで、川原寺出土の川原寺式軒瓦について報告をおこなったのは花谷浩氏と小谷徳彦氏である。両氏の分析は妥当なものであり、本稿でもその内容を基本的に踏襲する。

花谷氏の検討 花谷氏は川原寺創建軒瓦について検討した（花谷2009）。その中で川原寺601Cの范傷進行を5段階に細分した。各段階の特徴は小谷氏が以下のように明確にした（小谷2009）（図4～6）。

次に、川原寺601型式の製作技法の特徴として、裏面を中凹みにつくること、調整がヘラケズリであること、丸瓦先端四面にキザミを入れることを指摘した。そして、瓦当部と丸瓦部の接合技法を分析し、金子分類および范傷段階との対応を示した³。

このほか、飛鳥周辺で出土する川原寺式軒丸瓦を概観し、そのほとんど全てが川原寺と同范であり製品移動と判断できるとし、各寺で個別に作范した山田寺式軒丸瓦との違いを強調した。また、川原寺創建瓦の生産地に関する金子氏の見解をさらに一步進め、当初、五條市荒坂瓦窯で生産されたが、川原寺601C・651Cは生産地が変わった可能性を指摘した。

小谷氏の検討 小谷氏は、金子氏、花谷氏の見解を継承しつつ、さらに丸・平瓦も分析対象に加えて検討した。このうち川原寺601型式については、前述の通り花谷氏が明らかにしたC種の范傷進行の各段階の指標をより明確にした⁴。

また、C種は基本的に金子I型→II型→III型の順に変化したとみてよいこと、金子III型の瓦当厚は1.5~3.0cmで非常に薄手のものとやや薄手のものがあるが、范傷進行と瓦当厚には明確な関連が見られないことを指摘した。

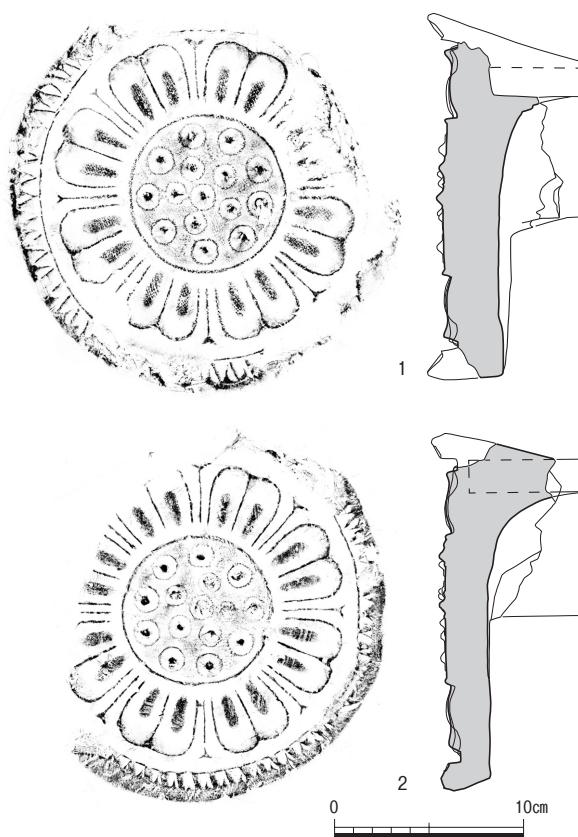


図6 川原寺601Cの范傷段階 2
1 : 4段階、2 : 5段階 縮尺1:4

III 飛鳥・藤原地域における川原寺601型式の様相

1 飛鳥・藤原地域における出土傾向

前章で解説した川原寺601型式の製作技法や范傷進行に関する従来の検討成果をふまえ、本章では、飛鳥・藤原地域の遺跡から出土した川原寺601型式を検討する。

対象とするのは、飛鳥・藤原地域で川原寺601型式とその同范瓦の出土・採集が報告さ

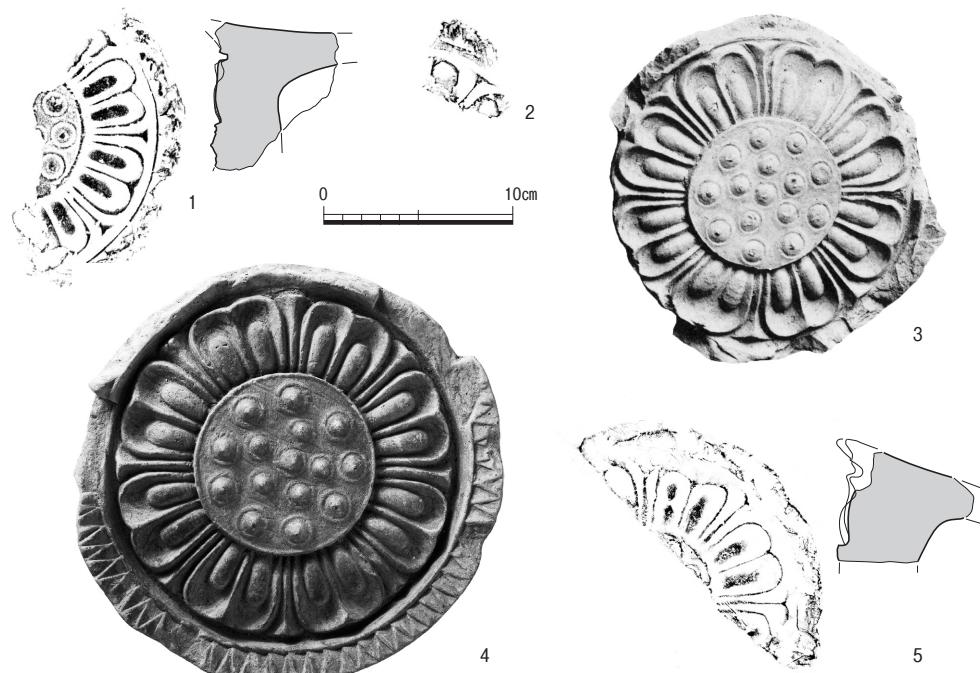


図7 橋寺出土・採集川原寺601型式

1 : A種、2 : B種、3 : B種か、4 : C種（橿原考古学研究所附属博物館蔵）、
5 : E種（橿原考古学研究所蔵） 縮尺 1 : 4

れている16遺跡である。遺跡ごとの点数に着目し、数点程度の少数しか認められない遺跡、10点以上の点数が認められる遺跡、50点以上のまとまった点数が認められる遺跡に分けて検討する。なお、採集品には資料的限界があり、刊行物掲載の拓本や写真から推測できるのみの資料もある。これらは出土瓦と同列に扱うことはできないが、種をある程度判別可能なものについて、補助的な資料として紹介する。

数点程度出土・採集された事例 川原寺601型式の出土・採集が見られる遺跡のほとんどが該当する。多く認められるのはC種で、橋寺、石神遺跡、飛鳥池遺跡、甘樺丘東麓遺跡、藤原京右京八条二坊西北坪から、次いで多いのはE種で、橋寺、飛鳥池遺跡、雷丘北方遺跡、橿原遺跡から、その次に多いA種は、橋寺、石神遺跡、大官大寺から、最も少ないB種は、橋寺、藤原宮西方官衙南地区から出土・採集されている。

遺跡別に見ると、橋寺では寺域北辺部からA・B種が各1点、E種が3点、種不明が1点出土している⁵。A種は金子Ⅰ型で丁寧な作り（図7-1）、B種は小片のため詳細不明だが、丸瓦部先端が当たる瓦当裏面側に刻み目を入れる（図7-2）。E種のうちの1点は金子ⅠないしⅡ型で内区周縁部の範傷が進んだ製品（図7-5）、他の1点も金子Ⅰ型ないしⅡ型であるが範傷は不明。出土地不明のC種1点は範傷1段階で金子Ⅰ型（図7-4）⁶、

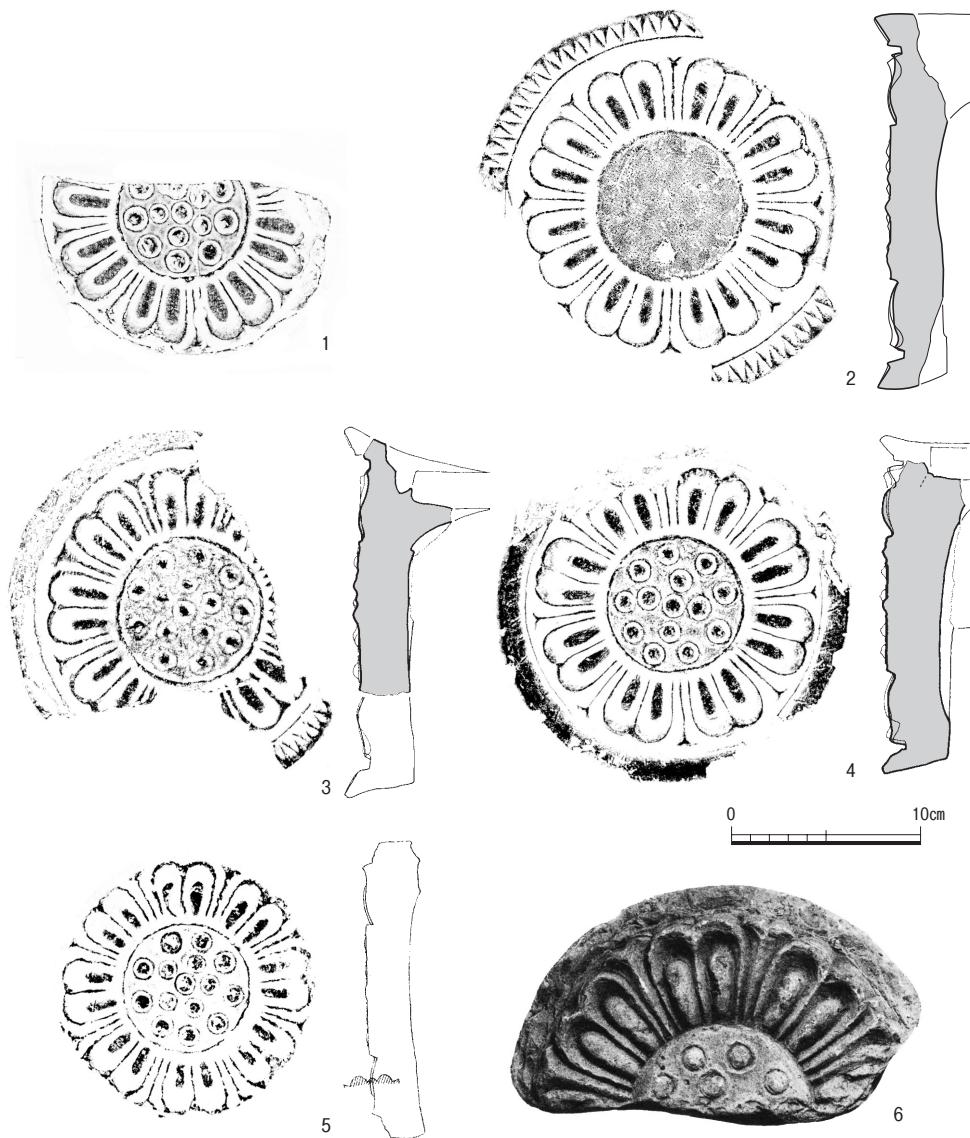


図8 飛鳥地域の川原寺601型式

1：石神遺跡出土A種、2：石神遺跡出土C種、3：飛鳥池遺跡出土C種、4：飛鳥池遺跡出土E種、5：豊浦寺採集C種か、6：豊浦寺採集E種か
1～4は縮尺1：4、5は縮尺約1：4。

このほかにB種の可能性がある採集品がある（図7-3）⁷。寺域北辺部で多く出土する傾向があるが、橋寺の北方には、東西道路を挟み川原寺の寺域が拡がる。これらの瓦が川原寺から流れ込んできた可能性の他に、川原寺との間を走る東西道路および橋寺北辺域の整備が、川原寺造営と深い関わりをもって進められた可能性も考えられよう。今後、この周辺の発掘調査がさらに進めば、一定量の川原寺式軒瓦の出土が予想される。

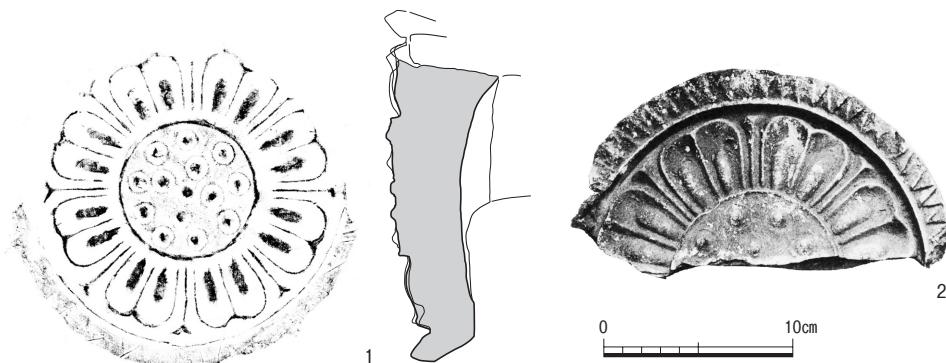


図9 雷丘周辺の川原寺601型式
1：雷丘北方遺跡出土E種、2：「雷村廃寺」採集C種か　　1は縮尺1：4。

石神遺跡では4点が出土し、A種が1点、C種が2点、種不明が1点。A種は金子I型で範傷や木目の浮き出しが若干認められる（図8-1）。遺跡南辺部出土⁸。C種2点は遺跡北方出土で、うち残りの良い1点は範傷3段階で瓦当が薄い金子III型（図8-2）、もう1点は範傷1～2段階の可能性が高い小片⁹、種不明の1点は南北溝SD640出土である¹⁰。飛鳥池遺跡のC種1点は金子III型で範傷5段階の製品（図8-3）。南半の工房域を中心に南北約60mの範囲に散在して出土¹¹。E種1点は金子I型で内区周縁部の範傷が少ない段階の製品。丸瓦部先端付近の四面のほか、丸瓦部先端が当たる瓦当裏面側にも刻み目を入れる（図8-4）。遺跡中央部付近と、そこから約90m離れた飛鳥池東方遺跡の出土品が接合した¹²。甘樋丘東麓遺跡の2点はいずれもC種で谷の西部から出土¹³。このほか、豊浦寺にはC種、E種の可能性がある採集品が（図8-5・6）¹⁴、浦坊廃寺（「石川精舎」）にC種の可能性がある小片の採集品がある¹⁵。

雷丘北方遺跡出土のE種1点は金子I型（図9-1）。範傷が進んだ製品で、整然と並ぶ建物群のうち「南殿」西辺部出土¹⁶。他のE種とは胎土、色調等の特徴がやや異なる。この周辺では、「雷村廃寺」にC種の可能性がある採集品がある（図9-2）¹⁷。大官大寺出土の2点のうち1点はA種、金子I型で範傷や木目の浮き出しがほとんど認められない（図10）。中門の南約50mの東西溝出土¹⁸。もう1点はC種の可能性が高い小片で中門北辺部出土¹⁹。日向寺にはC種の可能性がある採集品がある²⁰。藤原宮西方官衙南地区ではB種が1点出土（図11-1）²¹。明瞭な範傷は認められない。藤原京右京八条二坊西北坪出土のC種1点は金子III型で、範傷3段階以降であるが、4、5段階の指標となる部分を欠く（図11-2）²²。ただし、中房の木目の浮き出しが著しく、範傷5段階の可能性がある。権原遺跡のE種1点は金子I型で、内区周縁部の範傷が少ない製品（図11-3）。周辺の寺院に由来するものか²³。大窪寺にはA・B種の可能性がある採集品がある（図12）²⁴。

複数点数が認められる橘寺、石神遺跡、飛鳥池遺跡、大官大寺では、少数ながら異なる種が出土している（採集品も含めると、雷丘北方遺跡および「雷村廃寺」、豊浦寺、大窪寺も同様）。点数が少數であるため出土傾向を把握すること自体が困難であるが、偏りがなく特定の傾向が認められること自体が特徴ともいえるかもしれない。

なお、これらの遺跡から出土した川原寺601型式同範瓦は、雷丘北方遺跡出土のE種1点を除き、基本的に川原寺出土の川原寺601型式の同種、範傷同段階の製品と瓦当裏面の手法（金子分類）や丸瓦部先端の刻み目等の製作技法の特徴、肉眼観察による胎土、焼成、色調の特徴が共通する。このことは花谷氏が、飛鳥地域とその周辺で出土する川原寺式軒丸瓦が製品移動と判断できる、と評価したことを補強するものといえる。

10点以上出土した事例 飛鳥寺で、川原寺601型式と同範の飛鳥寺XII型式が18点出土しており、A種が6点、C種が9点、E種が2点、このほかC種の可能性がある小片1点がある。出土地点別に見ると、伽藍中枢部では中金堂の南でA種とC種が各1点出土しており、いずれも金子I型である（図13-1）²⁵。講堂周辺ではC種が1点出土しており、金子IないしII型で範傷3段階と見られる製品²⁶。寺域北辺部および北部ではA種4点、C種7点、E種1点が出土しており、A種はいずれも金子I型、C種は金子I型、およびIないしII型で、範傷が判別できる6点はいずれも範傷1～2段階（図13-2）、E種は金子I型で内区周縁部の範傷が少ないものである²⁷。これらはいずれも調整の省略が少ない丁寧な作りである。寺域西辺部ではA・E種各1点が出土²⁸。うちE種は範傷が少ないものである。C種の可能性がある小片1点は寺域東辺部からの出土である²⁹。

発掘調査地の偏りや出土点数が限られることなどの資料の制約はあるものの、各種とも金子IないしII型でIII型を含まず、C種では範傷4段階以降の製品は認められず、E種も範傷が進んだものを含まないなど、比較的古い段階の製品が多い傾向は認めてよい。また、特定の種に偏る傾向がないこと、川原寺出土の川原寺601型式の同種、範傷同段階の製品と瓦当裏面の手法（金子分類）や丸瓦部先端の刻み目等の製作技法の特徴、肉眼観察による胎土、焼成、色調の特徴が基本的に共通することなど、前述の数点程度出土・採集の事例と共に傾向が認められる。

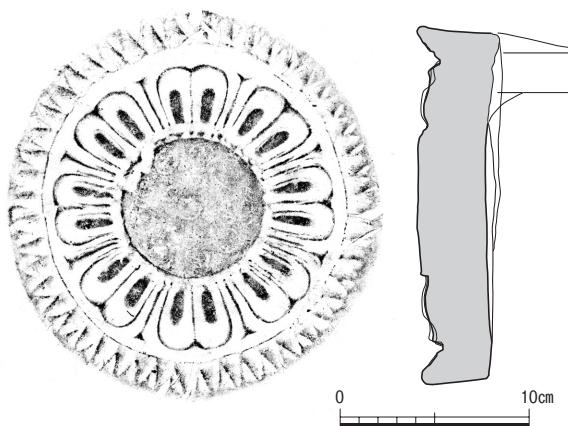


図10 大官大寺出土川原寺601A 縮尺1：4

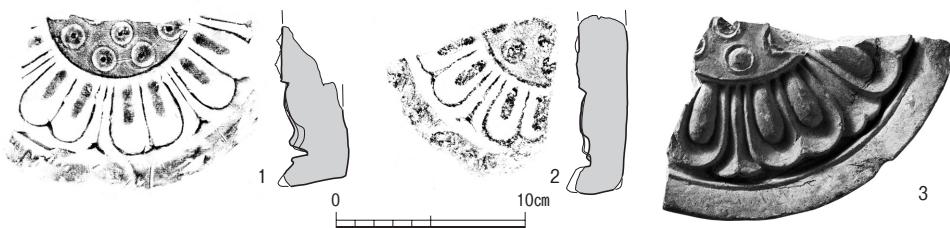


図11 藤原宮・京の川原寺601型式
1：藤原宮西方官衙南地区出土B種、2：藤原京右京八条二坊西北坪出土C種、
3：橿原遺跡E種（橿原考古学研究所附属博物館蔵） 縮尺1：4

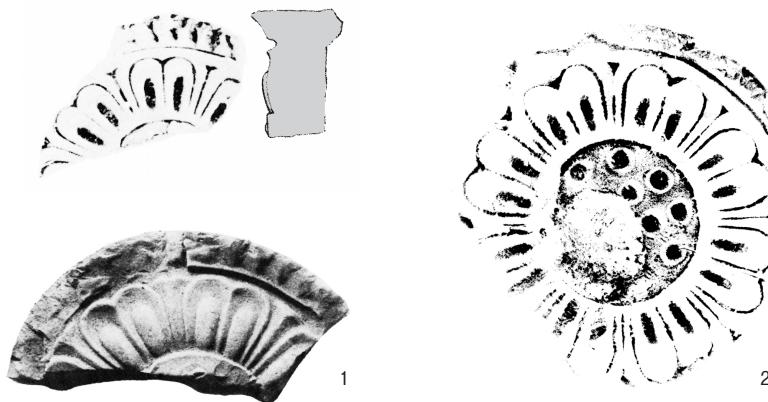


図12 大窪寺採集軒丸瓦
1：川原寺601Aか（縮尺約1：4）、2：川原寺601Bか（縮尺不明）

50点以上出土した事例 川原寺では400点以上が出土しているが、それ以外では和田廃寺で66点が出土している。川原寺については、紙幅の都合から瓦の概略の紹介のみに留め、別稿を期することとした。各種が一定量出土しているが、C種が5割程度を占め最も多く、ついで1～2割程度のA種、E種が多く、最も少ないB種は1割にも満たない³⁰。製作技法や胎土・焼成・色調などの特徴、C種における範傷進行とそれに合わせた変化などは、これまでの指摘通りであることを確認した。

C種は範傷1～5段階の各段階が認められ、金子I型は範傷2段階まで、金子III型は範傷3段階以降に限られること、瓦当部と丸瓦部の接合部分には、丸瓦部先端付近の端面、凹面、凸面、側面の四面に刻み目がほどこされるが、範傷が進んだ製品では一部省略が認められることもこれまでの指摘通りである。これに対応するように、瓦当側面などの調整の省略も目立つようになり、技法の変化と捉えることが可能であるが、この点は別稿にて詳細を説明することとした。

A種はすべて金子I型、B・E種は金子I型が多いが一部に金子II型を含み、E種の金子II型は内区周縁部の範傷が進んだ段階の製品である。A種には、瓦当部と丸瓦部の接合

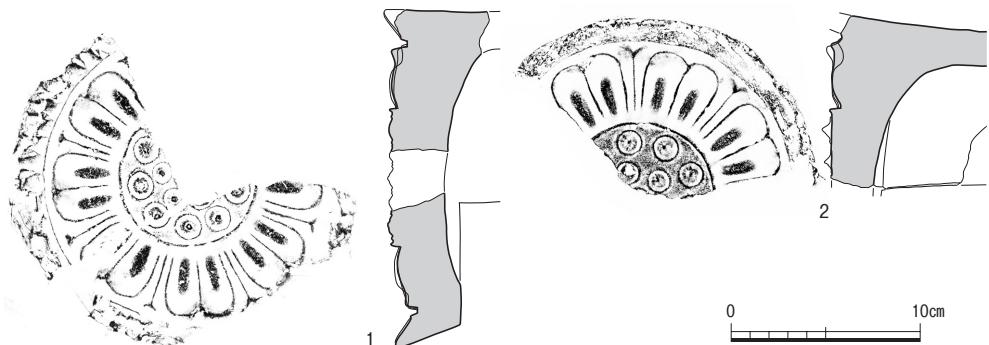


図13 飛鳥寺出土川原寺601型式 1 : A種、2 : C種 縮尺1:4

部の刻み目が、丸瓦部先端付近の四面だけでなく瓦当裏面側にも施されるものがあることは、花谷氏が指摘した通りであるが、B種およびE種にも瓦当裏面側に同様の刻み目らしい痕跡が認められるものがある。

A種については、ある段階で範が山城、近江に移動したと考えられており、点数が一定量に留まることは理解しやすい。しかし、C種が5割程度を占めること、そしてB・E種が少数に留まることについては、金子氏が指摘したように、種によって川原寺向け生産の終了する段階が異なることを推測させる。さらに花谷氏の指摘のとおり、C種は範傷進行とそれに合わせた製作技法、胎土・焼成・色調などの変化が認められることから、他種に比べ生産期間が長期間にわたったものと考えられる。

和田廃寺では、塔跡周辺とその南方の発掘調査により、川原寺601Cと同範の和田廃寺XX型式が多数出土した（図14-1）³¹。この和田廃寺XX型式、および中房蓮子が一重で山城高麗寺と同範のXXI型式（図14-2）を合わせた出土点数が、軒丸瓦全体の7割を占めるこ（奈文研1976b）、川原寺601型式のうち出土しているのはC種同範瓦のみで、範がかなり磨滅した段階の製品に限られること、金子Ⅲ型であることなどが指摘されてきた（金子1983、花谷2000）。今回、これらの指摘が正しいことを追認した。

さらに詳細に見ていくと、範傷段階が特定できるものはいずれも5段階である。欠損や磨滅等のため範傷段階が特定できないものについても、3段階以降であることは確実であり、範の傷み具合や木目の浮き出し具合は5段階の製品と変わらないことから、すべて5段階の製品と考えてよい。しかも、川原寺出土のC種5段階の製品と比較すると、5段階の中でも特に範の損耗が進んだ製品に限定される。胎土・焼成・色調の特徴は、いずれもほぼ共通する。瓦当裏面に注目すると、金子Ⅲ型であるがタテナデを強くほどこしたため若干中凹み気味になるものがある。しかし、金子Ⅰ型のように瓦当裏面下半の外周に平坦面をもつ丁寧な調整ではなく、仕上げの調整を省略したものと考えられる。

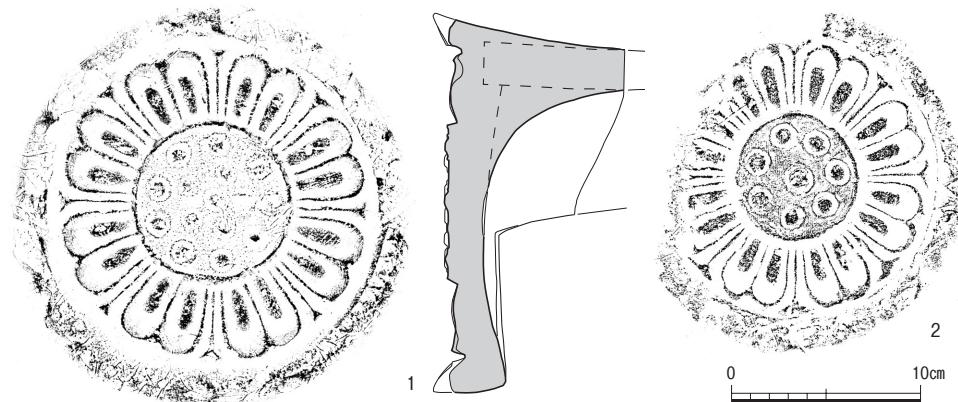


図14 和田廃寺出土軒丸瓦
1 : XX型式（川原寺601C同範）、2 : XXI型式（高麗寺同範） 縮尺 1 : 4

和田廃寺出土の和田廃寺XX型式の特徴をまとめると、いずれも川原寺601Cの范傷5段階に該当する製品と見られ、その中でも範がかなり損耗したものに限られること、胎土・焼成・色調の特徴がほぼ共通すること、製作技法はいずれも金子Ⅲ型であるが、瓦当裏面の調整がやや雑で省略が進んでいるものが含まれることが指摘できる。

2 飛鳥・藤原地域における川原寺601型式の供給

以上の分析から、飛鳥・藤原地域における川原寺601型式のうち、川原寺出土のものを除くと、和田廃寺出土例が特殊な在り方を示すことが明らかとなった。川原寺601Cと同範の和田廃寺XX型式は、範の損耗の具合や製作技法の特徴からみて、川原寺601Cの范傷5段階のなかでもかなり遅れた段階に該当する製品と考えられる。また、和田廃寺出土例は胎土・焼成・色調も含めたさまざまな特徴がほぼ共通することから、一括性の高い資料であるとみてよい。つまり、和田廃寺には、川原寺601Cの生産のかなり遅れた段階に、短期間で生産された製品が集中的に供給されたものと考えることができる。

これに対し、和田廃寺以外の事例においてはこうした傾向が認められず、同様の状況は想定しがたい。このうち、古い段階の製品が一定量出土する飛鳥寺については、一定期間に多くの瓦が供給されたと推測される。それ以外の、特に点数が少ない事例については、さまざまな背景を考慮すべきであろう。甘樺丘東麓遺跡から川原寺所用瓦が出土することについて、石田由紀子氏は甘樺丘東麓遺跡一帯が川原寺の寺領に含まれていたと考えられることから、川原寺で不要になった瓦片を廃棄したのではないか、と推測している（石田由紀子2010）。その他の事例についても、川原寺の瓦窯から供給された可能性のほかに、いったん川原寺などに供給された瓦が二次的に持ち込まれた場合も想定される。なお、橘寺は前述の通り、寺域北辺部の状況次第では異なる様相となる可能性もある。

IV まとめ

ここまで、川原寺601型式の製作技法、川原寺601Cの範傷段階を整理し、それに基づいて飛鳥・藤原地域における川原寺601型式の出土傾向を分析してきた。ここまで明らかにしてきた点を再度、列記すると以下の通りである。

- ・川原寺601型式は、金子氏、花谷氏、小谷氏の指摘通り、製作技法に特徴があり、C種やE種の範傷進行との対応から、それが徐々に変化していったことが分かる。
- ・川原寺出土の川原寺601型式は、C種が半数弱を占め、A・B・E種は少数に留まる。金子氏や花谷氏が指摘してきたとおり、各種の川原寺向け生産の終了時期が異なり、そのうちC種の生産が最も長期間にわたったことが考えられる。
- ・飛鳥・藤原地域から出土する川原寺601型式は、和田廃寺出土例および雷丘北方遺跡出土の1点を除き基本的に川原寺出土の川原寺601型式の同種、範傷同段階の製品と瓦当裏面の手法（金子分類）や丸瓦部先端の刻み目等の製作技法の特徴、肉眼観察による胎土、焼成、色調の特徴が共通する。このことは花谷氏が、飛鳥地域とその周辺で出土する川原寺式軒丸瓦は製品移動と判断できる、と評価したことを補強する。
- ・飛鳥・藤原地域から出土する川原寺601型式のうち、和田廃寺出土例（和田廃寺XX型式）は特殊な在り方を示す。C種の範傷5段階のなかでもかなり範の損耗が進んだ製品に限定されること、製作技法の一部を省略した製品を含むこと、胎土・焼成・色調がほぼ共通することから、和田廃寺には、川原寺601Cの生産のかなり遅れた段階に、短期間で生産された製品が集中的に供給されたものと考えられる。
- ・川原寺、和田廃寺を除く飛鳥・藤原地域の川原寺601型式の出土状況は、飛鳥寺に比較的古い段階の製品がやや多く出土する傾向が認められるものの、和田廃寺のように特定の種、範傷段階に偏る特徴は認められず、一定の傾向を見いだすことが難しい。川原寺の瓦窯から供給された可能性のほか、いったん川原寺などに供給された瓦が二次的に持ち込まれた場合も想定される。

今回の検討により、和田廃寺の特殊な状況がさらに明らかとなった。花谷氏は、和田廃寺では、7世紀後半に川原寺601C同範のXX型式と山城高麗寺同範のXXI型式による大規模な修造があり、このときに塔が造営されたものと推測している（花谷2000）。この際、まとまった量の和田廃寺XX型式が供給されたと考えられる。

さらに想像をたくましくすると、和田廃寺XX型式は、川原寺601C同範瓦の中でもかなり遅れた段階に生産された製品であることから、同種の川原寺向けの生産が一段落した後

に、和田廃寺向けに生産・供給がおこなわれたと想定することも一案である。しかしその場合でも、和田廃寺XX型式と似た特徴をもつ川原寺601Cが、川原寺からも出土していることや、和田廃寺XX型式の製作技法の特徴や一部省略が、川原寺601Cの技法変化の流れの中で矛盾なく理解できるものであることから、範の移動やまったく異なる瓦工による製作が推定できる状況ではない。川原寺の瓦窯（またはその系譜を引く造瓦組織）において生産された製品が和田廃寺に供給されたと考えるのが妥当であろう。

和田廃寺は、「葛木寺」に比定する福山敏男説が有力であり、発掘調査によりその説がさらに補強され、葛城氏の氏寺と考えられている（福山1934、大脇1997、花谷2000）。一方、川原寺は勅願による官営寺院との説が有力であり、四大寺の一つとして扱われたことが知られる。瓦生産もそれに見合った体制・組織でおこなわれたものと推測される。「葛木寺」に関する史料は乏しく、こうした瓦供給がおこなわれた背景をうかがい知ることは困難であるが³²、ここでは、7世紀後半の和田廃寺の塔造営を含む整備の際には、かなり特殊な状況が推定されることを指摘しておきたい。

本稿は、日本学術振興会科学的研究費補助金（課題番号：20H01362）の成果を含む。

謝 辞

本稿をなすに当たっては、以下の個人、機関に大変お世話になった。末筆ながら記して深甚の謝意を表したい。石田由紀子、岩永玲、栗山雅夫、杉山拓己、鈴木朋美、田中龍一、玉田芳英、平井洸史、降幡順子、道上祥武、森先一貴、山本崇、奈良県立橿原考古学研究所、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館（50音順、敬称略）。

註

- 1 近年では、瓦当紋様だけでなく、丸・平瓦も含めた製作技法や瓦窯の形態にも川原寺、荒坂瓦窯からの影響が及んだ事例が明らかにされている（大脇2018）。そのため、それらの祖型となる川原寺創建期の瓦を詳細に分析・検討することは、各地の瓦生産の実態解明に影響を与える重要な課題といえる。
- 2 このほか、金子氏は川原寺の主要伽藍との対応関係について、各種の製作終了が主要堂塔の構作の見通しがついた段階と仮定し、中金堂にA種、西金堂・塔にB・E種、講堂・僧坊・回廊などにC種が主に葺かれたと推定した。さらに、中凹みにするI型の技法を、川原寺式と様式が近い南滋賀廃寺式に認められる一本づくりのルジメントとみなし、III型の瓦当厚が薄くなるのは瓦当裏面に粘土を足す補足工程の省略と想定した。
- 3 このほか花谷氏が川原寺601型式の製作技法の特徴とその変化について、指摘した点を列記する。金子I型は丸瓦部先端の凹凸面と側面にタテ刻み目、広端面に周に沿う円弧状の刻み目を入れるが、A種にのみ、瓦当裏面側にも刻み目を入れるものが認められる。また、C種は接合技法に多様性があり、他種と同じく須恵質で硬質な範傷1・2段階に対し、範型が磨耗するとともに、砂粒を多く含み軟質焼成となる3～5段階には、丸瓦部広端面の刻み目を省略する

ものが現れること、瓦当を薄く作って丸瓦部先端を瓦当裏面に差し込まないものがあることを指摘した。ただしC種5段階にも瓦当を分厚く作った製品があるため、瓦当が厚いものから薄いものへと変化するわけではないとした。またC種4段階には瓦当面・裏面に布压痕を残す例があること、各種とも瓦当裏面と丸瓦部側面の取り付き部を直角になるようにケズリ調整をするが、C種には曲線的に仕上げるものがあることを指摘した。

- 4 このほか小谷氏は、金子Ⅱ型とⅢ型の境は瓦当厚3cmあたりにあること、金子Ⅱ型が瓦当裏面下半周縁部を周縁に沿って削るのに対し、金子Ⅲ型は不定方向に削って仕上げること、この金子Ⅱ型の調整手法は、金子Ⅰ型の瓦当裏面下半の手法のなごりであると考えられることを指摘した。また、C種について、金子Ⅰ型は範傷1段階のみ、金子Ⅲ型は3段階以降のみ、金子Ⅱ型は3段階には見られるが4・5段階にはごく少数であることを指摘した。
- 5 [奈文研調査] 橋寺1986-1次調査（奈文研1987）、橋寺1995-1次調査（奈文研1997a）。[奈良県立橿原考古学研究所調査] 橋寺第18次調査（関川1996）。
- 6 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館1998、目録番号1611。
- 7 保井1932、図版第五疏瓦2。
- 8 石神遺跡第3次調査（奈文研1984）。
- 9 飛鳥藤原第116次（石神遺跡第14次）調査（奈文研2002）。
- 10 石神遺跡第5次調査（奈文研1986a）。
- 11 飛鳥藤原第93次調査・飛鳥寺1991-1次調査（奈文研2021）。
- 12 飛鳥藤原第93次調査・飛鳥池東方第86次調査（奈文研2021）。
- 13 飛鳥藤原第141次調査（奈文研2006）。
- 14 C：石田茂作1977、図版第一七-17、E：保井1932、図版第三疏瓦15。
- 15 保井1932、図版第一一疏瓦2。
- 16 雷丘北方第2次（藤原宮第66-13次）調査（奈文研1992）。
- 17 保井1932、図版第二七疏瓦3。
- 18 大官大寺第2次調査（奈文研1976a）。
- 19 大官大寺第4次調査（奈文研1978a）。
- 20 石田茂作1977、図版第六九-3。ただしC種よりやや小さいため異範の可能性がある。
- 21 藤原宮第80次調査（奈文研1996）。
- 22 藤原宮第41-15次調査（奈文研1986b）。
- 23 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館1998、目録番号1696。
- 24 保井1932、図版第一八疏瓦4・5。このほか、橿原市による大塙寺の発掘調査では、伊藤敬太郎氏が川原寺651DもしくはE種と指摘する四重弧紋軒平瓦が出土している（橿原市千塚資料館1992、伊藤1991）。
- 25 飛鳥寺第1次調査（奈文研1958）。
- 26 飛鳥寺1993-2次調査（奈文研1994）。
- 27 飛鳥寺北方（第21-8次）調査（奈文研1978b）、飛鳥藤原第173-2次調査（奈文研2013）、飛鳥藤原第188-19次・第192-1次調査（奈文研2018）、飛鳥藤原第197-2次調査（奈文研2019）。
- 28 飛鳥寺1996-3次調査（奈文研1997b）。
- 29 飛鳥藤原第197-6次調査（奈文研2020）。
- 30 川原寺第1次調査以降の各次の調査（奈文研1960・2004ほか）。
- 31 和田廃寺第1次調査（奈文研1975）、和田廃寺第2次調査（奈文研1976b）。

32 和田廃寺に関する文字資料は非常に少ないが、7世紀後半の「大寺」の墨書をもつ土師器の出土が知られている（奈文研1976b）。和田廃寺XX型式の特殊な状況から、さまざまな想像をかき立てられるところであるが、ここではわずか1点の墨書土器を過大に評価することは控えておきたい。

参考文献

- 石田茂作 1977『飛鳥時代寺院史の研究』 株式会社第一書房（初出は、石田茂作 1936『飛鳥時代寺院址の研究』 聖徳太子奉賛会）
- 石田由紀子 2010「甘樺丘東麓遺跡の調査—第157・161次 瓦類」『奈良文化財研究所紀要2010』 奈良文化財研究所 pp.104-105
- 伊藤敬太郎 1991「うつされた塔心礎—大窪寺と山本寺—」『瓦衣千年—森郁夫先生還暦記念論文集—』 森郁夫先生還暦記念論文集刊行会 pp.78-89
- 大脇潔 1997「蘇我氏の氏寺から見たその本拠」『堅田直先生古希記念論文集』 堅田直先生古希記念論文集刊行会 pp.459-477
- 大脇潔 2018「7世紀の瓦生産—花組・星組から荒坂組まで—」『古代』第141号 早稲田大学考古学会 pp.51-88
- 橿原市千塚資料館 1992『橿原の飛鳥・白鳳時代寺院』 橿原市千塚資料館
- 金子裕之 1983「軒丸瓦製作技法に関する二、三の問題—川原寺の軒丸瓦を中心として—」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所 pp.269-285
- 川畑聰・渡部明夫・清野孝之・石田由紀子・道上祥武 2020「讚岐仲村廃寺の川原寺式軒丸瓦と川原寺601C」『奈良文化財研究所紀要2020』 奈良文化財研究所 pp.14-15
- 小谷徳彦 2009「川原寺の創建瓦」『古代瓦研究Ⅲ—川原寺式軒瓦の成立と展開—』 奈良文化財研究所 pp.141-152
- 清野孝之 2022「川原寺式軒丸瓦601型式C種の同范瓦の検討」『奈良文化財研究所紀要2022』 奈良文化財研究所 pp.22-23
- 関川尚功 1996「史跡橘寺境内発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1995年度（第2分冊）』 奈良県立橿原考古学研究所 pp. 1-10
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1998『大和考古資料目録』第23集、飛鳥・奈良時代寺院出土の軒瓦 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 奈良国立文化財研究所 1958『飛鳥寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第5冊 奈良国立文化財研究所
- 奈良国立文化財研究所 1960『川原寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第9冊 奈良国立文化財研究所
- 奈良国立文化財研究所 1975「和田廃寺の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報5』 奈良国立文化財研究所 pp.39-43
- 奈良国立文化財研究所 1976a「大官大寺第2次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報6』 奈良国立文化財研究所 pp.25-37
- 奈良国立文化財研究所 1976b「和田廃寺第2次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報6』 奈良国立文化財研究所 pp.38-46
- 奈良国立文化財研究所 1978a「大官大寺第4次（推定金堂跡）の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報8』 奈良国立文化財研究所 pp.27-34

- 奈良国立文化財研究所 1978b「飛鳥寺北方の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報8』 奈良国立文化財研究所 pp.52-53
- 奈良国立文化財研究所 1984「石神遺跡第3次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報14』 奈良国立文化財研究所 pp.39-52
- 奈良国立文化財研究所 1986a「石神遺跡第5次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報16』 奈良国立文化財研究所 pp.45-53
- 奈良国立文化財研究所 1986b「右京八条二坊の調査（第41-15次）」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報16』 奈良国立文化財研究所 pp.41-42
- 奈良国立文化財研究所 1987「橘寺（1986-1次）の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報17』 奈良国立文化財研究所 pp.66-68
- 奈良国立文化財研究所 1992「左京十一条三坊の調査（第66-1・13次）（雷丘北方遺跡）」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報22』 奈良国立文化財研究所 pp.21-29
- 奈良国立文化財研究所 1994「飛鳥寺の調査 A 1993-2次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報24』 奈良国立文化財研究所 pp.101-108
- 奈良国立文化財研究所 1996「西方官衙南地区の調査（第79・80次）」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報26』 奈良国立文化財研究所 pp.20-40
- 奈良文化財研究所 1997a「橘寺の調査—1995-1次」『奈良文化財研究所年報1997-II』 奈良文化財研究所 pp.72-74
- 奈良国立文化財研究所 1997b「飛鳥寺の調査 1996-1・3次、第84次」『奈良国立文化財研究所年報1997-II』 奈良国立文化財研究所 pp.44-56
- 奈良文化財研究所 2002「石神遺跡の調査—第116次」『奈良文化財研究所紀要2002』 奈良文化財研究所 pp.66-70
- 奈良文化財研究所 2004『川原寺寺域北限の調査 飛鳥藤原第119-5次発掘調査報告』
- 奈良文化財研究所 2006「甘樅丘東麓遺跡の調査—第141次」『奈良文化財研究所紀要2006』 奈良文化財研究所 pp.87-90
- 奈良文化財研究所 2013「2012年度都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）小規模調査等の概要 173-2次 飛鳥寺」『奈良文化財研究所紀要2013』 奈良文化財研究所 p.84
- 奈良文化財研究所 2018「飛鳥寺北方の調査—第188-19次、第192-1・9次」『奈良文化財研究所紀要2018』 奈良文化財研究所 pp.106-109
- 奈良文化財研究所 2019「飛鳥寺旧境内の調査—第197-1・2・6次」『奈良文化財研究所紀要2019』 奈良文化財研究所 pp.101-106
- 奈良文化財研究所 2020「飛鳥寺旧境内の調査—第197-6次」『奈良文化財研究所紀要2020』 奈良文化財研究所 pp.110-116
- 奈良文化財研究所 2021『飛鳥池遺跡発掘調査報告』 奈良文化財研究所学報第71冊 奈良文化財研究所
- 花谷浩 2000「京内廿四寺について」『研究論集XI』 奈良国立文化財研究所学報第60冊 奈良国立文化財研究所 pp.77-202
- 花谷浩 2009「飛鳥の川原寺式軒瓦」『古代瓦研究III—川原寺式軒瓦の成立と展開—』 奈良文化財研究所 pp.3-10
- 福山敏男 1934「葛木寺及び廐坂寺の位置について—所謂大野の丘北塔址及び石川精舎址に関する疑問—」『大和志』第1卷第3号 大和国史会 pp.77-86

福山敏男 1948 「川原寺（弘福寺）」『奈良朝寺院の研究』 高桐書院 pp.87-109
保井芳太郎 1932 『大和上代寺院志』 大和史学会

挿図出典

図1～3、5、6、7-1・2、8-1・2、9-1、10、11-1・2、13、14：筆者作成

図4、7-4、11-3：写真は奈良文化財研究所蔵

図7-3、8-6、9-2、12-2：保井1932より転載

図7-5：石田由紀子が拓本、実測、筆者製図

図8-3・4：奈文研2021より、5：石田茂作1977より転載

図12-1（図・拓本）：石田茂作1977より、（写真）：保井1932より転載

出土品のうち、各図に所蔵元の明記がないものは奈良文化財研究所蔵